

朝鮮

ソ連の占領下、北鮮での体験記

鳥取県 江原直己

父母は今の北朝鮮、朝鮮咸鏡南道元山府に明治三十七年ごろ渡鮮した由、私はその元山で明治四十四年三月一日、三男として生れた。

父熊太郎は居留民団副団長、その後元山商業会議所書記長（今の専務）をし、のち終戦近くまで永年朝日新聞記者をしていた。私が物心ついた頃は会議所に勤めていた。よく弁当を届けたりしたが当時（大正五年頃）月給十円の辞令を誇らしげに見せられた時の笑顔を記憶しているが、十円の月給は高級だったに違いない。

い。

父は終戦の年昭和二十年四月二十九日天長節の日に七十二歳で他界し、母は早くに亡くなった。私は兄、克己、妹二人の四人で成長し、長兄は早く内地に帰り家を継いでいた。

兄は剣道で名をなし、私は陸上競技、スキー、ラグビーの選手でスキーでは昭和七、八、九年三年連続で、札幌、大鰐、野沢の全日本スキー選手権大会に朝鮮代表で出場、陸上競技は昭和五年日独親善対抗競技の千六百メートルリレーメンバーだったし、ラグビーはスリークォーターレフトウイング（14）でトライメーカーでもあった。

生死の別れみち

昭和十九年七月三十一日、最後の召集部隊、平壤（ピ

ヨンヤン)の「虎部隊」に召集された。本部付き要員となつて午前一時出陣式に参加した。

頭髮と爪を切つて遺品として残し、認識票を首に吊し、第一装用軍服で完全武装(約七貫〇二十キロ)をして整列。出発直前の最終点呼―人員二人超過―とお前とお前は予備隊編入で、そのお前の一人が私だった。

この瞬間、私の運命はガラリと変つた。後で判つたが、この部隊は全員レイテ作戦の要員で、作戦に向かう途中、機雷に触れて全員海中に没し、同級生数人を含めてすべて帰らぬ客となつた。私も恐らく海の藻屑となつていただろう。

敗 戦

その後病に罹り、約三か月後に即日帰郷し、自宅で一時休養、のちに在郷軍人会、警防団等を引き受け銃後で尽くした。

家は妻貞子の実家で陸軍、海軍の指定旅館で愛媛館といい、朝鮮総督や第十九、二十師団長も泊つていた特級旅館である。終戦の詔勅はその日宿泊していた陸軍将校と共に聞いたが、初めは何かわけが解らなかつ

たがだんだんと敗戦と解ると同時に不安感がひしひしと襲ってくる。

午後三時ごろから外の空気がおかしくなつた。何ともいえないもやもやした空気になつた。何時の間か意識したのか赤旗と朝鮮旗を両手に持った朝鮮人が「マONSEI、マONSEI」と叫びうごめきながら道に溢れ、朝鮮だけがお祭りのようにざわめき日本人は一步も外に出られない、昨日まで使つていた朝鮮人が一ぺんに豹変して、いばつて偉そうに振る舞うがどうすることも出来ない。

この時初めて「国」を知つた。国の重みと大事さを痛感した。襲ってくるのは不安だけである、外国でしかもソ連等敵国で敗戦を味わつた者以外は到底国の重みは解らないだろう。少し落ち着いて一週間余りたつた八月二十二日近くの税関で海を見ていると遙か沖合に何か解らないものが動いている、じつと見つめてみると一、二分の間に百隻以上にも見えるボートである、見る見るうちに五、六十隻ものソ連上陸用舟艇が幅数百メートルにわたつて波をけつて襲ってくる。

ザワ／＼と押し寄せる姿は雄大というか壮大という
かいや怖ろしいとか威圧感も加わって瞬^{ツギタ}く間に
迫り上陸してきた。日本軍は暁部隊。腰に剣もしてい
ない輸送隊である何の術もなく全員捕虜になった。

運命のvari目

特殊な地位に置かれた

八月二十五日夕刻、旅館にソ連将校が十人くらい土
足で乗り込んできた。通訳を通じ「主人を出せ。」父
は老齢なので私が出た。

将校の一人が階段の数段上から私を見降しながらピ
ストルを胸に突きつけ「この家を接收するから承知し
ろ。」今でも不思議に思うが私は全く恐くも、怖ろし
くも、驚きも、あわてもしなかった。勿論ドキ／＼も
しないし、平気だった。

即座に「よろしい、しかしここには昨日生れたばかりの
母子が寝ている。又老人二人、女（女中）七人が
いる。ここからうしろの部屋（旅館の住居の部分五部
屋）を残してもらいたい。」とホテルの部分だけの接
収交渉に入ったが、胸にはピストルが突き付けられた

ままでズドンと来れば終りである。（今考えても本当
によくやれたと思います。）クソ度胸というヤツだろ
うか。

将校達は何か話し合っていたが「とにかく部屋を見
せる。」という。その時私の頭にある閃きがあった。
初めに昨日お産したばかりの婦人の寝ている部屋、次
に七人が集まっている女中部屋、そして三十五の客室
を全部見せ、応接間に案内しお茶とお菓子を出させた。
数十分、何か解らない言葉で、ベチャ／＼やっていた
が、このもてなしが効いたのか、ソ連共産社会ではこ
んなサービスは思いもかけないことだったからかある
いは長年の戦争ですさんでいた心が柔^{やわ}らかになったの
か又は家庭の暖かさに触れたのか。空気がクルツと変
ってきた。数十分いろいろ協議の結果、どういう風の
吹きまわしか「このホテルを将校宿泊所にする」と決
定、私は将校宿舍長、全員が今まで通り住むことが出
来た。日本式の旅館サービスはソ連将校にはこの上な
い便利なもので本当に喜ばれた。

ソ連軍が上陸した日

敗戦後心は日増しに落ち着き始めたが終戦が一週間も過ぎて日ソ不可侵条約を踏みにじって押し寄せてきた日、八月二十二日、前述した上陸用舟艇が押し寄せた数時間後には元山市内には、坊主頭の兵隊（囚人兵）が個別に侵入し、手あたり次第掠奪し始めた、時計や万年筆等。女は危険を感じ、逃げたり押入れや便所等に隠れて難を逃れたりした。知識のない囚人兵は腕時計を腕に何個もつけて、止まると捨ててしまう。ネジを知らないのだ。万年筆も何本も何本もポケットに入れてほこらしげにしている、ウソのような本当の話。二、三日して通常の部隊と交代した。

暁部隊の兵隊は全員捕虜となったが八月二十八日夕刻、裏のニワトリが急に騒ぎだしたので恐る恐るのぞいてみると軍服をかかえて一人の日本兵がひそんでいた。家に案内して私の服を着せ、かくまうことにした。結局最後まで一緒にいたがこの人は今も大阪に現存する水ガラス工場山壽工業株式会社高橋誠社長だった。以後約半年数奇な生活が続いた。

ソ連赤軍太平洋艦隊元山第四工場

将校宿舎は順調に進んだ。宿舎にフライチ、チャペルという技術将校が常駐していて、埠頭に積んである毒ガス原料のソーダ灰の利用法について相談をうけた。延々四キロに亘る日本軍が放棄したソーダ灰である。さいわい前述の高橋社長を招いて相談した。高橋社長が脱出して私の所に来なければ私には全く解らないことである、奇しき縁とでもいおうか。

いろいろな使途は考えられるが深入りしてソ連で出来ないものを作ると日本に帰れなくなるので苛性ソーダか石けんを作ることとして製品をウラジオストックに送るための工場を造った。ソ連赤軍太平洋艦隊元山第四工場である。

私はソ連赤軍太平洋艦隊元山第四工場長⇨海軍大佐待遇の辞令と通行証を貰った（第一工場は朝鮮石油⇨日石の傍系大坪社長）、働く人は日本人だけにした。

この頃一日二十四時間強制労働があり一日二百人ぐらい次々指名されて皆苦しんでいた。夜間零下十度近い時でも夜を徹して「ダワイ〜」で働かされるので、非常に恐れていた。この工場で働くとそれがなくなる、

その上に全員に食糧配給と工員に月給四百円、高橋技師八百円、工場長の私は千二百円貰えるので聞きつけたたくさんの人が来られ交代制にした。中には税関長や中学校長等、高等官の人も来られた。戦前私がお世話になった方もおられたが強制労働指名がないだけでも有り難いのに食糧や給料まで貰えると大変感謝された。

この時働いて頂いた中学校の先生（由浪）と小学校の先生（小林進）が境港市と米子市に住んでおられ終戦後十数年経ってこのことが解り奇遇を喜んだ。当時はお互いに同郷であることは全く判らなかつた。工場は順調に進んで製品はぞくぞくウラジオストックに船で運ばれた。この作業はすべて強制労働の日本人がさせられていたのである。

私は常にソ連海軍大佐の身分証明書を持っているのでどこにでも自由に行けた。民警隊からとめられても身分証明書を出せば拘束もされないし怖いものはない。敗戦で日本人全部が避難民のような惨めな服装でいる時、私一人、帽子をかぶりネクタイをして大

きな顔をして歩いていたら目障りでもあり、癪にも障つただろう。よく尋問を受けた。

その頃全家庭に毎日のように品物の供出命令が出た。今日は釜を、次は靴を、又ラジオを、体温計をと、家庭用品の供出命令でしかもソ連軍の命によりと書いてある。ソ連の軍隊が毎日、日用品の供出命令はおかしいと司令部で調べて貰ったら朝鮮民警隊の作業と解り中止させた。又日本人が不当な圧迫を受けると直ぐ司令部を通じ中止させた。陰で日本人のために随分尽くしたが日本人世話会の数人の人しか知らなかつたと思う。

日本人世話会とは有志によって作られたミニ役場のなもので随分頼りにされた。あの混乱の中でそれまで皆の中核になっていた有志相集まり避難して来る人々の世話をし、引き揚げ後の住所録を作ったり、内地の情報を知らせたり誰に頼まれたのでもないのに実に秩序ある世話役をかって出していた。帰国後必要になるだろうと財産の証明書も作つたりした。結局何にもならなかつたが。

終戦半年も過ぎると持ち物を売って辛うじて飢えを凌いでいた者もだんだんと家を追われ、又元山より更に北から逃げて来る人々も増えて、寺や学校等に集団避難をしていたが風呂があるわけでもなく病気が流行しだした。中でも一番怖れられたのがシラミが媒介する発疹チフスである。発病すると高熱が出て一週間ぐらいで死んでしまう。毎日のように死人が出るが薬もないし医者もいない。不安は日に日に募るばかり。風呂はない、自然シラミはわく。どうしようもなく、一日も早く三十八度線を突破して内地に帰りたい。三十八度線にはソ連軍が監視している。隙を縫って突破した者もいるが、〇〇はつかまったそうだと、いう噂のような情報も入ってくる。

ある日、日本人世話会で中核となって働いていた高橋、笠井、松本の三氏が発疹チフスに罹って死んだ。という知らせが来た。葬儀、勿論出来る筈もない、火葬場はあっても窯は使えない。行つて見ると午後二時頃十二体の死体が投げ棄ててあった。

我々は深さ一メートル半、幅二メートル半ぐらいの

穴を掘り、薪を敷き、その上に死体を並べその上に薪を積んで火葬の準備をした。誰が用意したのか油が注がれ、四方からマッチで火をつけた。五、六メートル以上も炎はあがり参会の全員が合掌する。

十五体の遺体は焼かれてゆく。鼻をつく臭いが充満する。次々に木を放りこんでなるべく完全に焼きたかった。やがて火葬は終ったが死体は識別出来ないほど乱れていた。悲しいことに民警隊が監視していて遺骨は持つて帰らせない。

上から土を被せて、涙もかわかないまま心をひかれつつ、最後のお別れをして引き揚げた。気が付いてみると新しい土盛がアチコチたくさんある。聞いてみると、火葬をした方はよい方で、殆どが、大きな穴にほうり込まれて埋めてある由。敗戦直後外地で亡くなった人は皆こんな葬られ方をしたのである。これはまだよい方で逃亡途中、山で死んだ者はそのまま、川に飛びこんで死んだ者も無数にある。

ソ連下の日本人避難民

北鮮の日本人は満州よりも悪かった。満州では昭和

二十一年からコロ島からの正式引き揚げがあったが、朝鮮は今日に至るまで引き揚げはなく、全員がそれぞれ工夫して三十八度線のソ連の関所を隙を見て突破して帰ったのである。鉄原を経て突破しようとして銃殺された者もあり川を渡るところを捕った者もある。いずれも闇に乗じて決行するが半分近く失敗したようだ。元山は海岸であるので舟を雇って（多額の金が必要）集団で逃げかけても途中で三十八度線以北の江原道に上陸したら、だまされてまだ北鮮だったという例が次々に聞かされて、海では駄目だということになった。

家は追われ、品物も民警隊の供出で巻きあげられ、永い間の売り食いでもう何も無い。死を覚悟して三十八度線突破以外に方法はない。

私がお世話になった大村謙次郎氏（名古屋市出身）は元山府きつての富豪で一代で富を為した人。道会議長（県）府会議長（市）をしていた。事業は民間では朝鮮一の製材工場経営者である。勿論、住居も工場（約二万坪）も接収されて六畳と四畳半の家に移された。

工場はその時働いていた朝鮮人林が社長に就任した。生活も困難になり落胆と疲労が重なって肝臓を悪くされたが食べるために無理をしてタバコを作り飢えを凌いだ。作ったタバコは全部私が引き受けて将校宿舎で売りさばいた。又このタバコが飛ぶように売れるので不思議に思っていたらさすが一代で財を為した人は違う、町にタバコは日本人が作ってはらんしたが一般にはタバコを紙で巻いただけのものであるが社長は一度蒸して、乾燥さす前に砂糖水を振りかけて味をつけていた。戦後あの混乱の中で、仕事をするということになると充分に研究して立派な品物を作るこの根性、今の私の頭の中にも残っている。

昭和二十一年五月脱出を試みられ、友人の稲塚医師を伴って無事突破はされたが、三十八度線を越えた安堵感と無理していた肝臓が、急に悪化して内地に着かない内にあたら五十何歳の生涯を終えられた由。私は帰国後これを知った。生きて帰られたら再び活躍出来る年令と手腕を持っておられただけに惜しみて余りある。生活のよかった方はソ連下では同じような運命

を辿った方は多い。

大人ばかりではない、ある日七歳の男の子が百八十里（七二〇キロ）の清津から一人で歩いて日本人世話会にやってきた。内地の住所氏名を書いて胸にブラさげて一人歩いて来たという。お父さんは殺された。お母さんはどこかに行ってしまったから僕一人で日本に帰るといつている、いろいろなだめ、注意をし、励まし、幾分か食べる物を与え元気に出発したが無事日本に辿りついただろうか。確か香川県と書いてあったが。こんなけなげな子もあるが逆に子供を川に捨ててきた母親もある。子供を朝鮮人にやってきた母親もある。

哀れだった雪中の母と乳呑み児の凍死体

北から脱出する避難民はほとんど元山府を通過するが、半数は街に入って寺や学校に避難して、再び三十八度線突破を試みる。半数は山道を通って逃れていく。途切れることもあるが列を作ったように次々と歩いていくが十一月まではよいが十二月に入ると零度の日が続きやがて雪が降りだす。初めに書いたが私がスキー

選手であったことから推測できるだろうが、多い時は一メートル五十センチぐらい通常でも一メートル近くの雪が降る。二月。積雪一メートル以上。

悲しい通知を受けたので日本人世話会の人々とスキー場横の林道に検分に行った。お天気は非常によいが零下五〜六度ぐらい（朝九時頃）そこに、雪の中で大木を背に切り株に腰を降ろして、この寒いのに胸をあけて乳を飲ませている親子がいるが動いていない。乳をふくませながら凍死している母親と乳のみ子の姿があつた。おそらく早朝零下十度近くになっていたのだろう。

たまに通り過ぎる脱出者は哀れを感じても、どうしようもないし、明日は我が身である。そのまま過ぎ去って行く。我々も戸惑ったが、やがて涙が流れて止まらない。こんな悲痛な姿に接することは今後一生を通じてないだろう。脱出の途中、乳を飲ませながら、木を背にし疲れが出てうとうと眠ったのではなからうか、ご存知の通り雪の中ではどんなに眠くても決して眠ってはいけない、殆どそのまま死んでしまうもので

ある。

この母親は乳を吞ませながら眠つたのだらう、そしてそのまゝ、他界したが子供を抱えたまま亡くなったことを知らない乳児はそんな母親とも知らず乳を吸いながら、この子もまた、死んでもわが子を離さなかつた母親、それを知らずに又死んで行つた子どもの姿が想像出来るでしょうか。土は凍つて掘れないので雪を埋めて姿をかくし、春に埋め直すことにし、合掌して一旦引き揚げた。

三月初旬、訪れた時は、そこにはその姿はなかつた。前にも述べたが北鮮からは引き揚げではなく脱出であり、三十八度線突破の寸前に殺された者は数限りない。私の兄、克己は（当時三十六歳）清津や羅津の税関に勤めていたが終戦の時はシンカバチンの税関にいた。家族は兄の帰りを待つたが帰つて来ないので子供三人を連れて私のいる元山に来て（姉も以前元山にいたことがある）兄を待つたが混乱のさなか不可能だったかも。後日兄の友人等からの話によると、兄は家族の所には戻れないし単独鉄原を経て三十八度線を突破

しかけたが失敗、城津近辺まで連れ戻され、元山に行けば私がいるから何とかなるだらうと向かつたらしい――家族が元山に来ていることは知っていない――貨車で元山まで来たが元山にはもう日本人は全部内地に帰つて一人もいないと聞かされた。

これが私と反対の運命の別れみちだった。再び清津に戻つたようだが、税関の制服を着たまゝの姿だったので何かに間違われたのか多数の日本人と共に銃殺されたらしい。元山に降りていたら、私もいるし、家族も来ていたので帰国後は恐らく楽しい生活が出来ていただらう。兄の妻は今下関に住み子供全部を立派に育てあげた。兄が元山に降りていたら一人で三人の子供を苦勞して育てることなく楽しい家庭生活が送れていただらうと思うと及ばぬことながら残念である。

昭和二十一年四月のある日、石けん工場長としてモスクワに行かないか、月給は七万四貫えるという話が持ち上つた。高橋技師と共にこれは大変だ早く逃げることを考えなければということになった。身軽な高橋

技師は五月中旬、単独で脱出し、無事内地へ帰った。

私は将校宿舎長と工場長をしているので秘密裡に脱出することは誠に難しい。しかしモスクワ行ききの勧誘があつたので、下手すると日本に帰れなくなるかも知解らない、という気持で頭が一杯！

さてどうすれば家族揃って日本に帰れるか、色々考えたが陸は危険。海は、何人もの友人が舟を雇って帰るが騙されて北鮮内の港に揚げさせられてしまつてゐる。闇舟は幾らでもあるが考えてみると、彼等も南鮮に上陸すると捕えられて舟も没収となるから、金もうけと身を守るためには日本人を安々と南鮮に送るわけには行かなかつたのだ。でも何とかして！ そうだ朝鮮人の船長や船員を使うからだ。しかし舟を売つてはくれない。

ふと頭に浮んだのは、航行中予め日本人船長と船員を客として乗り込ませ、三十八度線突破の前、即ち北鮮に送り返される前に、船長以下を威して日本側で操縦する以外にない。途轍もないことを考え、実行する計画をたてた。

大きな漁業家がいた。金持ちであつた石井さんは朝鮮民警隊から軟禁の形を取られ自由の身ではなかつた。いわゆる当時の金持ち、小林儀三郎、岡本、植田の酒造会社等は何れも外出禁止の軟禁の身であつた。

私はその石井さんを尋ねて舟で脱出する方法を相談した。漁船のチャーターは出来る、漁船の船倉に引揚者を積み込むのであるが、希望者を募つて、チャーター料を作るのである。凡そ三十トンもあつたらうか石井さんが直ぐ見付けた。石井さんの計算で一人八百円で百五、六十人集めればよい、と決まつた。

さてその方法、軟禁中の石井さんも極秘に船に乗ることが勿論第一条件である。出帆場所は元山から約六里（二十四キロ）南のソーインという、戸数二十数戸の漁村である。日本人世話会や極秘の口コミでこの船で内地に脱出する希望者を募つた。一方これを挙行するのに沖に出たら船を日本人で略奪してしまわないと暗の内に三十八度線の北に着けられてしまう。石井さんは綿密に策を練つた。

配下の

船長 一人

機関長 一人

機関士 二人

屈強な船員 五人

計九人の船舶操縦可能なチームが出来た。九人は脱出客として乗り込み石井社長の命令一下、朝鮮人の船員を縛って船を奪う作戦は出来た。石井社長は看視付きだからうまく偽装しないと外に出れない。浴衣姿で下駄を履き、ステッキを置いて散歩に出るような姿で、下駄履きのまま六里の道を歩いて貰うことにした。

計画は順調に進み五月十二日の夕方、各々ソーインに集合することに決定した。石井社長や私の計画だというので意外に希望者が集まり総勢二百十七人。少し大きな船に替えたらしい。予想外に十六万円集まったので、ソーインの村で村民に相当な謝礼を出すことにした。

出発日は決まり、計画作戦も済み石井社長の脱出方法も決まったが私達一行が脱け出すのにも又智恵をしぼった。妻貞子、長男弘（十歳）次男愈訓（六歳）三

男達夫（二歳）それに隣に住む元税関長の奥さんと娘さん。六里の道であるから小さな子供は歩けない、ソ連軍のトラックで脱出することに決めた。トラックは私の請求で使えるのでトラックを要求、伍長になったデレクターに少々金を握らせ今日は私の言う所に行け、兵隊は一人だけ、と命じて家の前にトラックをつけさせ昨夜から荷造りしていたリュックサックを積みこみ、人を積んだ。そして荷物に見せるために全員、伏せ、その上に完全にムシロをかけてソーインの手前の峠まで四十分間、皆は息をこらしてムシロの中にいた。途中の関門も私が助手席に立って敬礼をして通過、無事ソーインに着いた。

私達はそこで降り、「私は今から日本に帰る。工場に君が着いた頃は船で出発しているから、その旨報告をしる。」又少し札束を握らせてトラックを帰した。伍長は恐らく罰をうけたに違いない。夕刻石井社長は浴衣姿で、下駄履きであらわれた。船長以下も集まった。少し沖に漁船がある。あれがそうだと言われた。その夜は何かの都合で出発出来ない由。さいわいにも

この部落は全員日本人びいきで心よく泊めてくれた。チャーター料に余分があったので全戸に金を配った（一か月分の生活費に相当する額と思つた）。夕食を出してくれた。我々日本人が口にするのが出来なかつた銀めし、真つ白なゴハンを山盛り、魚も充分、漬物もいっぱい。皆涙を流さんばかり喜び感謝もした。終戦後初めて味わつたご馳走である。

翌十三日、昼は人目につくといけないので全員オンドルにひそんだ。夕方薄暗くなり遠くが見えないようになつて静かに乗船した。魚の代りに人間が満員。元山の沖では望遠鏡で看視している。又どこに監視船がいるか解らない。見つかつたら巡視船に拿捕される。静かに出港したがまだひや／＼ものである。

船は沖に向けて真つ直ぐ走つた。地球が円いので十海里ぐらい沖に出ると、港からは見えないのである。十海里ぐらい沖に出た時、突然ピリ／＼と笛が鳴つた。合図の笛、船員はそれ／＼の部署に構えていた。

全員懐に隠し持っていた出刃包丁を突き出し船長と機関長は直ぐ替つて舵をとり他の船員は朝鮮人船員を縄

でしばつた。

船は順調に進み十五海里を過ぎ、やがて三十八度線に近付いた。

『皆さん、今三十八度線を突破しました。』と石井社長の張り裂けるような大きな声、バンザイー、バンザイー、期せずして全員飛び上つた。この時の嬉しかつたこと。まだ胸に残っている。

船は南鮮の注文津に入港した。上陸すると南鮮では心よく迎えてくれた空気は北鮮とは全く違う。砂浜であつたが安堵して海岸で一夜を過した。船と船員は南鮮側に捕えられた。

翌日米国のLP船に分乗し、釜山港に入港した。検査のため船で十日ぐらい泊められ、五月三十日無事博多港に上陸、命がけの北鮮脱出に成功した。釜山からは日本のかつての関釜連絡船景福丸であつた。

一応日本に帰つたものの一人千円の生活費を基金としてこれから新しく立ち上らなければならぬ。財産は全部置いてきた、日本人世話会で受けた財産証明書を見ると損害合計金額拾九萬壹千參百六拾參圓參拾壹

錢也（昭和二十一年四月二十三日）とある。現在二千倍と計算しても約三億八千万円となる。

闇商売をしながら辛うじて生活を維持し、引き揚げ者住宅建築にも努力、国家補助も得て作りあげた。

昭和二十五年米子市で鳥取県産業観光大博覧会が催されるに当り同事務局長に推され、神戸博やアメリカ博が赤字であったのに米子博は黒字だった。終って、傾きかけていた山陰日日新聞社取締役営業局長で社を興し、ついで協同組合丸合理事長（現存）日本で七番目のスーパー株式会社主婦の店社長、この十年間に主婦の店をしながらアメリカにも渡り（当時は洋行と言われ駅に何百人も送ってバンザイで送り出された時代）勉強して現在の心理学院学院長になり近く二十五年目に入る。今、本職のほかには米子市老人クラブ連合会長、社団法人鳥取県老人クラブ連合会副会長、社会福祉法人鳥取県社会福祉協議会副会長、社団法人米子広域シルバー人材センター理事等その他種々の県、市の当て職が多数あり出来る限りの社会奉仕に努めている。

昭和二十二年引揚者住宅が出来て妻貞子は米子で最初の純喫茶店を十月五日開店した、

ふぁみりい喫茶 明治は

「美味うまさが違う

甘党 明治」を

標語に今日迄四十六年間経営し、米子商工会議所婦人部理事をしている。十歳だった長男弘は立教大学を出て小売業界のコンサルタント、その長男は中学校の教諭、長女は当地の山陰放送に勤めている。次男愈訓も立教大学を卒業して自動車会社の支店長をしているが米子東高等学校時代野球部で甲子園に出場して準決勝まで進んだことがある、投手長島時代のセンター江原で殊勲打を打った。長男はグンゼ株式会社の試験室、長女は国家公務員試験に合格、農林水産技官として岡山で勤務している。三男は日本大学を出て現在米子で軽食喫茶モンシェリーを経営し、長女は旭化成歯科診療所歯科衛生士。長男は来年大学受験である。

終りよければ すべてよし

これからの余生を、社会のお荷物にならないよう努め、

気楽に暮したいと願っている。

執筆者の横顔

江原氏は父親が、朝鮮元山で商工会議所の専務などされた方の御曹司である。彼は明治四十四年元山生れで元山で長じた。

昭和二十年召集となったが、入営間もなく病気になるので帰休を命ぜられ、自宅で療養していた。

その年の八月十五日、日本敗戦ニュース発表以後は、朝鮮人は徒党を組んで、日本人に対し、日本人のどろぼうなどと怒鳴り散らし、何の理由もないのに暴行を加える、それが段々人数が多くなつて暴動化する、危険千万、日本人はみな戸窓を閉めて家族で自己防衛のありさまである。

江原氏は、このきびしい環境の現実にあつて、生れて初めて「国」を知った。これまでは朝鮮人から、日本人の馬鹿野郎、どろぼうなどと言われたり暴行をうけることはなかった。今、正当防衛などと言って抵抗したら惨殺されてしまうのである。

日本人として国をもっているが、もう既にその国の

力のないのに大きな衝撃を受けた。

八月二十三日、元山にソ連艦隊が上陸するに至り、その暴虐が一層はげしくなった。

日頃、朝鮮人から心よからず思われていた日本人はことごとく密告されて逮捕される、危険この上ない、こうしたトラブルがある度に、警察にソ連の司令部に折衝して解決に当つた命知らずの勇氣は江原氏にあった。助けてもらった人からは神か仏のように思われた。

また、八月初旬、元山沿岸に日本軍の毒ガス原料ソーダ灰の積み残しを見つけたソ連軍から、これを何か加工できないかと問われた。江原氏は、石鹼と苛性ソーダの加工ができるかと教えた。早速ソ連軍の命をうけた江原氏は工場を設け、食べるに困っていた日本人二百余人を雇い製造を始めて大いに助かった。つまり化学の学識に富んだ江原氏のお陰でソ連軍は勿論、在留日本人の命をつないだ恩人である。

彼、江原氏は引揚げて米子に在って心理学院学院長に就任して二十五年になり、その間、市老人クラブ連合会長、県老人クラブ連合会副会長、県社会福祉協議

会副会長等々に推されて社会福祉に貢献している人徳の士である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

裸で得た第二の人生

神奈川県 山岸 猛 男

私達一家は全員終戦で外地(北鮮、南鮮)から引揚げてきた。

父は神奈川県足柄上郡松田町寄やしろに出生した。

明治四十四年東京大学卒業と共に、朝鮮総督府財政部に赴任した。

昭和十年三月退官、その後、終戦まで朝鮮の実業界にあった。父の人生は日本の国の朝鮮半島の統治に始まり終戦と共に終わったのである。

その間、朝鮮の各地の生活の中で、私達五人の子供が出生し、二人が夭逝した。

朝鮮半島での仕事と生活は父の人生のすべてであった。

父の出生地神奈川県寄村は丹沢の山ふところに抱かれ、明治時代、中等学校の国語の教科書の中に平和な村、"寄の里"とうたわれたほどの山村である。

明治二十一年三月、時の文部大臣、井上毅が寄村を訪れ、風俗習慣をたずね村民の純良素朴に痛く感じ

われもまた住まばやとしも思う哉な

みやまの奥の寄の里

と歌った平和な村であった。

このような平和な村であったが、父は晩年この村での生活は考えていなかったようである。父は外地に骨を埋めるつもりであった。

その生活の中で子供達を身の回りに置くことを考えて希望していたようでもあった。あの大らかな生活が願いであった。

そんな気持が、今回の大戦で戦禍がはげしくなるにつれて、子供達を比較的安全な場所に置きたい父の情でもあった。